

## 「廃嫡者」考

樋口正明

「廃嫡者」(EL DESDICHADO)はジェラルド・ド・ネルヴァル(GÉRARD DE Nerval)の詩集「シメール」(LES CHIMÈRES)の巻頭の詩である。八篇の詩、また数え方によっては十二篇の十四行詩から成るこの詩集を通読すれば、恐らく誰しもこれが甚だ興味をそそる構成になっていること、個々の詩を読み取るのに神話やかなり特殊な思想的背景についての予備知識が必要であることを感じるに違いない。中でも「廃嫡者」と「アルテミス」(ARTÉMIS)は出来映えからしても、難解さにおいても双璧をなしている。無論これらは難解さの故に優れているのではなく、見事な作詩技術、ある種の交響曲を連想させるアレクサンドランを用いた荘重沈痛な詩の響き、すこぶる印象的なイメージを喚起する詩句等が不可思議な魅力をかもし出し、ネルヴァル独特の詩の世界をつくりあげているからである。そしてその中にちりばめられている一見不可解な、何とでも解釈出来そうな詩句が、かえって想像力をい

ここで取りあげる「廃嫡者」はネルヴァルの詩の中で恐らく最も有名なものであろう。研究書も数多くあって、中にはこの詩を錬金術やタロット・カルタ(tarot)に結びつけて説いているものもある。これらは論としては非常に面白いが、やはり特殊な解釈であるから、ここでは触れない。

この詩の翻訳も立派なものが何種かあって、「廃嫡者」という訳語も定着しているようである。しかも詳細な註釈もついているから、改めてこれを論じるのは蛇足とも思われるが、もう一度詩を読み直して、自分なりにその内容を整理してみようと思う。

EL DESDICHADO<sup>2</sup>

Je suis le ténébreux, — le veuf, l'inconsolé,

Le prince d'Aquitaine à la tour abolie :

Ma seule étoile est morte, — et mon luth constellé

たく刺激する。

Porte le soleil noir de la Melancolie.

Dans la nuit du tombeau, toi qui m'as consolé,

Rends-moi le Pausilippe et la mer d'Italie,

La fleur qui plaisait tant à mon coeur désolé,

Et la treille où le pampre à la rose s'allie.

Suis-je Amour ou Phébus? ... Lusignan ou Biron?

Mon front est rouge encor du baiser de la reine;

J'ai rêvé dans la grotte où nage la sirène ...

Et j'ai deux fois vainqueur traversé l'Achéron :

Mondulant tour à tour sur la Lyre d'Orphée

Les soupirs de la sainte et les cris de la fée.

### 廃嫡者

われは暗鬱なる者、一妻失いし者、一慰めなき者、

崩れたる塔に住まうアキテーヌの領主。

掛け替えなきわが星は逝きぬ、一星ちりばめしわが琵琶を、

飾るは憂愁の黒き太陽。

墳墓の暗闇の中にて、汝、われを慰めし者よ、

返せ、ポシリポの丘、イタリアの海を、

悲しみに沈みしわが心をいたく魅了せしかの花を、

薔薇に葉枝のからむ葡萄の棚を。

われはアモルかポエブスか、……リュジニャンかピロンか。

わが額に女王の口づけの痕いまだ赤し。

人魚泳ぐ洞窟に入りて、われは夢見き……

またわれは二度勝ち誇りてアケロンの河を渡りき。

オルフェの豎琴にのせ、交交に、

聖女の溜息と妖精の叫びを歌いつつ。

題名はウォルター・スコット (Walter Scott) の「アイヴァンホー (Ivanhoe)」の一節にある言葉で、スペイン語。これに相当するフランス語 *le déshérité* は財産またはその権利を奪われた者、更には落伍者、不幸な者を意味する。

第一節の意味するところは明瞭である。自分は一体何者であるのか、あるいは現実的にどのような状態に置かれているのかを極めて断定的な調子で先ず述べ、次に何故そうなったか、その原因を明らかにしている。

われは暗鬱なる者、妻失いし者、慰めなき者、崩れたる塔に住まうアキテーヌの領主。

アキテーヌはガロンヌ川 (La Garonne) 流域を中心とする地方の古名であり、地理的な用語としては、広くフランス南西部を言う。ネルヴァルは彼の本姓であるラブリュニー (Labrunie) 家の家系図を自分つくり、彼の先祖がこの地方の領主であったとしている。その中に、ペリゴール (Perigord) には三つのラブリュニーの古塔があると書かれている。その末裔として、彼はアキテーヌの領主を名乗るのである。彼の手紙の中には、これに因んだ署名が見られる。<sup>4</sup>

掛け替えなきわが星は逝きぬ、

彼がかくも惨憺たる状態に陥ったのは、ひとえに唯一無二の恋人を失ったからである。

ネルヴァルの恋人を語るとき、普通この言葉は三段構えで用いられているようである。

第一は実在の生身の人間、たとえば彼の生涯を通じての宿命的な恋人とも言うべき女優のジェニー・コロン (Jenny Colon) あるいは補足的にフーシェール男爵夫人ソフィ・ドーズ (Sophie Dawes) 等である。後者はネルヴァルの少年時代、彼の故郷ヴァロア (le Valois) の城に住んでいて、当時彼が憧れのまなざしで見えていたと思われるイギリス人である。これらは彼の作品に登場する恋人の原型である。

第二は原型を土台にして彼の頭の中で作り直され、作品の中に描かれる恋人、たとえば「シルヴィ」(SYLVIE) の中のオーレリア (Aurélie) やアドリエヌ (Adrienne) 等<sup>5</sup>、これは人間である。

第三は「オーレリア」(AURELIA) の中の恋人オーレリアである。この作品でオーレリアは初め第二段階の恋人として登場するが、彼女は死後、ネルヴァルの夢と狂気の中で変貌し、大詰になって、その正体を現わす。これはもう並の恋人ではなく、総合され、理想化され、人格化された女性である。言い換えれば、普通の人間ではなく、神話の中の人物であり、女神の化身、あるいは女神そのものと言ってよい。

第一節においては、舞台のスターをも表わす星が死んで、詩人が絶望しているという現実の事態を述べているだけであるから、この星は第二段階の恋人と考えて差し支えない。ただし後に述べる幾つかの理由によって、星は地上に対する天空を、つまり人間界に対する神話的世界を暗示する働きもして、第三節以後の詩の展開を準備する。したがって星は第三段階の恋人の萌芽を含んだ言葉である。

星ちりばめしわが琵琶を、飾るは憂愁の黒き太陽。

詩人の絶望を反映して、その持物である琵琶にも明るい太陽は輝いていない。

憂愁の黒き太陽は「オーレリア」においてネルヴァルの夢の中に出て来るアルブレヒト・デューラー (Albrecht Dürer) の銅版画、「メラン

「メレンコリア」(MELENCOLIA)を踏まえている。<sup>5</sup>この版画には地上に墮ちて、物思いに耽る天使と共に日蝕を思わせる黒い大きな太陽が描かれている。また「オーレリア」の第二部第四章でネルヴァルは世界の終末を予感するが、その時、空に黒い太陽を見る。<sup>6</sup>そんなことを抜きにしても、この句は暗い絶望的なイメージを呼び起こす。

ちなみに琵琶(Luth)という言葉は、詩の用語としては抒情詩のシンボルとして用いられるから、その意味を重ね合わせて考えることもできる。

この詩句ならびに星という言葉は恋人の死と詩人の絶望という地上の出来事から、詩のイメージを天空へ広げる働きもしている。

第二節は少々問題になる箇所があるが、全体としては、第一節が詩人の現状を述べているのに対し、そのような状態にある詩人にとって慰めとなった過去の出来事が主題となる。

墳墓の暗闇の中に、汝、われを慰めし者よ、

墳墓の暗闇とは、素直に読めば、恋人を失った後の現実の世界のたとえであると考えられる。「オーレリア」の第一部第六章において、ネルヴァルは恋人の死と符合する夢を見る。その中で、彼女の死を暗示する出来事の後、彼のいた庭園が突然墓地のような様相に変わり、彼は「世界は暗闇だ」という声を聞くのである。<sup>7</sup>

論が分かれるのは、汝、われを慰めし者よという句の汝が誰を指すかという点である。煎じ詰めれば、これは汝が第一節の星、あるいはその延長線上にある神格化された恋人と同一であるか否かということである。

この句に続く三つの詩句は、いずれも「オクタヴィ」(OCTAVIE)その他に描かれるイタリア旅行の思い出に繋がっている。イタリアで現実には如何なることがあったのかは判らない。しかしオクタヴィの名で作品の中に現われるイギリス娘はネルヴァルにかなり強烈な印象を与えたい。その痕跡は同じ詩集に収められている「デルフィカ」(DELIFICA)の中にも見られる。二人の関係は恋と呼べるかどうか判らないが、ともかくオクタヴィはネルヴァルの現実の苦しみを一瞬忘れさせ、束の間の慰めを与えた。イタリアの地とそこで起きた出来事はネルヴァルにとって、現実を忘れさせる楽しい思い出である。<sup>8</sup>

このような思い出が絡んでいる以上、ここで死んだ恋人に呼びかけるのは筋違いである。その延長線上にある女神については、「オーレリア」の第二部第六章に描かれる夢の中で、女神が彼を慰める場面があるが、夢の内容はこの詩とまったく違っている。<sup>9</sup>それにこれを女神とすると、第三節以後とうまく繋がらない。これについては後に述べるが、とりあえず、ここでは汝とはオクタヴィであるとしておく。

ただし、ネルヴァルの作品においては、唯一無二の恋人であるオーレリア以外に彼が一時心を奪われる女性が登場するとき、出て来た時点では、その女性は絶望的な恋を忘れさせる好ましいものとして描かれ、そ

の後に真実の恋から目をそむけさせる、言わば誘惑者としての性格を与えられることが多い。

返せ、ポシリポの丘、イタリアの海を、

ポシリポの丘は「オクタヴィ」の中に挿入された恋人宛の手紙に描かれていて一つのエピソードの舞台でもある。<sup>10</sup> ナポリの近くにあつて、有名な洞窟がある。

イタリアでは黒い太陽とは対照的に明るい太陽が輝いている。

悲しみに沈みしわが心をいたく魅了せしかの花を、

この詩の草稿の一つには、<sup>11</sup> 花に対する作者の註としてオダメキ (Fancolie) とある。これは第一節の憂愁 (Melancolie) の余韻を感じさせる。

花はネルヴァルの作品に色々な意味をもって現われてくる。たとえば「オーレリア」第二部の終章のメモラブル (MEMORABLES) の中には次のような一節がある。「ヒマラヤ山脈の頂上に一輪の花が生まれた——私を忘れないで——星のまたたくまなざしが一瞬花に止まった。すると、これに答える外国語のやさしい声が聞こえた。——勿忘草<sup>12</sup>」詩の中では星も花もイタリックで書かれているから、あるいはこのような関係をネルヴァルは想定しているのかも知れない。その場合は星は大宇

宙のもの、花はそれに対する地上のものである。また同じ詩集の「黄金詩篇」(VERS D'ORES) には「花はみな開花した自然の魂」という詩句もある。<sup>13</sup>

薔薇に葉枝のからむ葡萄の棚を。

葡萄棚は「オクタヴィ」や「オーレリア」等にしばしば出てくる。また「シルヴィ」には「葡萄と蔓薔薇が壁を飾っている二十軒程の高ぶぎの家」という描写もある。<sup>14</sup> 概して葡萄棚は懐かしい、あるいは心にしばしの安らぎを与える風物として描かれている。

草稿の一つには、<sup>15</sup> この詩句に対する作者の註として、ヴァチカンの庭 (Jardin du Vatican) と書き込まれている。そして「パンドラ」(LA PANDORA) の中の夢の場面には、「ヴァチカンの花をあしらった穹窿仕立ての葡萄棚」という一節があるから、<sup>16</sup> これもまずイタリアを想定して書かれた詩句と見てよい。

ここで今一度これまでの詩節をふり返って見ると、第一節において、詩人は絶望的な現状を述べる。その原因は星で表わされる恋人の死である。第二節では、過去において、ひととき彼に慰めを与えたイタリアの出来事を想起して、詩人は出来得ればもう一度その慰めを得たいと、その慰めを与えてくれた相手、汝に願うのである。しかしそれは第一節の極めて断定的な口調から推して到底叶えられはしないであろう。

第三節は問題が多い。ここに到って詩の内容が一転する。

われはアモルかポエプスカ、……リュジニャンかピロンか。

列挙された二対の個有名詞は前一对が神、後の一对は人間である。

アモルはギリシャ神話のエロス、ポエプスはアポロンである。

リュジニャン家は中世フランスの名家の一つで長い間フランス中西部のマルシュ (La Marche) とアンググモワ (L'Angoumois) の両地方を支配していた。十字軍に参加し、キプロス島やエルサレムを支配したのはリュジニャン家の分家の一つである。その祖先レーモン (Raimond de Lusignan) の妻はメリュジーヌ (Mélusine) であり、その居城はこの妻の手でつくられたと伝えられている。伝説によれば、メリュジーヌは、結婚するに際して、夫に自分の裸体を見ないと誓わせたが、夫は男の常として我慢出来なくなり、ついに入浴中の妻を覗き見た。そこで彼が見た妻の姿は上半身が女、下半身が蛇であった。一説によれば魚であったとも伝えられている。その正体は妖精、それも水の精<sup>オランダイヌ</sup>であった。かくして夫の前から姿を消したメリュジーヌはリュジニャン家に不幸が起る度に、それに先立って城の塔に現われ、叫びを発して予告をしたという。ピロンには諸説がある。フランス中世の元師で公爵シャルル・ド・ピロン (Charles de Biron) あるいはその祖先、シエクスピアの喜劇「恋の骨折損」に登場するピロン、イギリスの詩人バイロン卿等である。ネルヴァルが他の作品の中でピロンについて言及しているのは「ヴァ

ロワの民謡と伝説」(CHANSONS ET LÉGENDES DU VALOIS) だけである。この中に出てくるのは恐らくシャルル・ド・ピロンであろう。

彼はアンリー四世に仕えていたが、その働きに対する報酬に不満を抱き、サヴォワ公及びスペインと共謀し、国家に謀反を企てた。しかし発覚して一六〇二年バスチーユ監獄の中庭で打首の刑に処せられた。

それでは一对ずつの神と人は何を意味するのであろうか。この詩において不幸な恋を語る詩人がそれらに自らをなぞらえようとしているのであるから、それは恋愛に関わることに相違ない。

まずエロスは話題の少ない神様で、物語らしい物語と言えば、ネルヴァルの愛読書、アプレイウスの「黄金のロバ」に出てくる「エロスとプシケ」だけである。この愛神と人間の姫君との愛の物語はあまりにも有名なので詳しく述べる必要はないが、物語は前段が破局で終わり、後段ではハッピー・エンドとなっている。破局の原因は見てはならないものを誓いを破って見てしまったことにあり、その償いをするために、プシケは地獄下りまでしなければならぬ。

アポロンには話題が多々あるが、もっとも有名なものの一つはダブネーとの物語であろう。エロスの悪戯により、アポロンは激しい恋心を起させる矢を、妖精のダブネーは見る者すべてが厭わしくなる矢を射られる。追いつがるアポロンを見て、ダブネーは河の神である父に助けを求め、父は娘を月桂樹に変える。残されたアポロンは彼女を忘れ兼ね、その思い出のために月桂樹を自分の木とし、あらゆる勝利者や栄光ある者の頭を月桂冠で飾るように定めた。

ダフネ (Dafné) は同じ詩集の「デルフィカ」にも登場する。

リュジニャンは先に述べた通り、禁を犯して妻の裸体を見たために妻を失った。

ここ迄のところ、エロスの場合は一旦破局に至った恋が一連の試練の後に成就するから幸福な恋と言える。アポロンの場合は恋人を失った後に、恋人に栄光を与え、その思い出を永遠に伝えるしか道がないので、これは不幸な恋である。リュジニャンも妻を失った。ただしメリュジーヌは後になりリュジニャン家の守神の如きものになる。

そこで最後のピロンを決めなければならぬが、これは今の所、手にあまる。ただ詩句の釣合を考えると、ピロンは中世の伝説的色合のある人物で、これには恋愛事件が絡んでなくてはならないように思われる。特にその相手が後出の女王の如きものであれば好都合である。

バイロン卿は時代が新し過ぎる。「恋の骨折損」の舞台はナヴァール国であるし、アキテーヌの話も出てくるから、実のない恋のサンプルとして考えられなくもない。ネルヴァルがこの喜劇を読んでいたことは、その書簡からも明らかである。<sup>17</sup>しかしこのピロンはネルヴァルが自らをなぞらえるにはあまりにも軽佻浮薄であり、恋の相手も王女ではなく、無論伝説的色合もない。先に触れたシャルル・ド・ピロンについても恋愛沙汰があったのかどうか詳らかでない。ただヴァロワ地方には、現在には伝わっていないけれども、ネルヴァルの時代にはよく知られていたそのような伝説があったとも考えられる。しかしこれは臆測に過ぎないから、今のところピロンは不明であると言う他はない。

ここでもう一度詩句にもどる。この詩句は自らに対する問いかけである。第一節において自分は……である (Je suis) と言いついて、第三節で彼は何故また自分は……であるのか (Suis-je) という疑問を提出したのであるか。これは明らかに自分という言葉の質が第一節と第三節とは異なっているからである。言葉を換えれば、これら二つの詩句では、自分が存在する場の次元が違っている。第一節及び第二節の対象となっている世界はいわゆる現実の世界であり、そこにいるのは人間である。ところが第三節及び第四節の対象となっている世界は神話的伝説的な世界であり、そこに登場するのは神、妖精、あるいは伝説的人物である。つまりネルヴァルは第一節及び第二節の人間世界から、第三節及び第四節の神話的伝説的世界へ入って行く。

まだ第三節の初めの詩句の検討を終えたばかりであるが、ここから先の五行、つまり第四節の最後までは一続きになっているので、まずこれらの詩句を一まとめにして考えてみる。

これらの詩句はすべて初めの詩句の問の答えになるべきものである。ところが読んで判る通り、詩人は問に対して、まともに解答を与えていない。ただ自分はいかかしくしかじかの経験をしたと述べているだけであって、だから自分は、たとえばアモルの如きもの、あるいはリュジニャンの如きものと、はっきり判るようには答えていない。それでは彼はそれら全部と比較し得る何者かであると言っているのであるか。一見そのように見える。恐らくこれらの神と人の何らかの行為や運命が詩人の

経験と重なり合うのであろう。詩人の経験が第一節及び第二節に現われる女性に関連する事柄であることは言を俟たない。

わが額に女王の口づけの痕いまだ赤し。

ネルヴァルが通常女王と呼ぶ人物は二人いる。一人はシバの女王であり、今一人はアルテミスシアあるいはアルテミーゼ (Artemise) である。

シバの女王の如き女性とされる実在の人物はソフィ・ドーズで、それを仄めかす言葉が「シルヴィ」や「オーレリア」の文中に見られる。<sup>18</sup>

「ボヘミアの小さな城」(PETITS CHÂTEAUX DE BOHÈME) には恋人の女優オーレリイを暁の女王にたとえた件がある。<sup>19</sup> そして「東方旅行」(VOYAGE EN ORIENT) の中の美しいエピソード、「暁の女王と

精霊の王ソロモンの物語」(HISTOIRE DE LA REINE DU MATIN ET DE SOLIMAN PRINCE DES GÉNIES) はシバの女王とソロモンの伝説を題材とした物語である。

草稿の一つには、<sup>20</sup> 女王の箇所「女王カンダス」(Reine Candace?) という作者の註の如きものが書き込まれている。この古代エチオピア女王の名はシバの女王と同じ意味で用いられていると見てよい。

アルテミスシアは紀元前四世紀頃の古代カリアの女王である。夫であるマウソロス王に先立たれた女王は悲しみのあまり、世界の七不思議の一つに数えられる壮大な墓陵マウソレウムをハリカルナッソスにつくらせた。しかしそれでも悲しみが和らぎはせず、ついに彼女は夫の灰を杯に

落とし、酒と共に自らの腹中に葬った。この伝説はネルヴァルの琴線に触れたと見え、同じ詩集の「アルテミス」にも言及され、その中で、彼は、恋人に先立たれ、その死後もなお恋人を愛してやまぬ者として、アルテミスシアに自らをなぞらえている。

また「シルヴィ」に登場して少年のネルヴァルと口づけをするアドリエヌは「フランスの古い王家に繋がる一族の末裔の一人の孫娘」として描かれ、<sup>21</sup> 同書で主人公は恋人のオーレリイがアドリエヌの生まれ変わりだと口走るのである。<sup>22</sup>

これらの女王は「オーレリア」において、最終的には理想化され神格化された恋人オーレリアの中に集約される。オーレリアとはギリシャ神話のアルテミスその他の女神、キリスト教の聖母マリア、シバの女王、ネルヴァルの恋人や母親等の総合された呼び名であり、それらのものを一身に集めて体现するのがエジプトの女神イシスである。<sup>23</sup>

したがって、女王と星とは同一人物である。

人魚泳ぐ洞窟に入りて、われは夢見き……

人魚は美しい歌声によって人間を惑わせるギリシャ神話の妖精である。

ネルヴァルの作品の中で、これに相当するのはオクタヴィイである。ネルヴァルが初めてマルセーユで彼女に出会ったのは、海の中であり、彼女は水の娘 (cette fille des eaux) と書かれ、ある日魚を手にして現



われ、彼にそれを与えるのである。<sup>24</sup>

その後、この物語の舞台はイタリアに移る。洞窟のイメージはイタリアにまたオクタヴ<sup>125</sup>に結びつく。

またわれは二度勝ち誇りてアケロンの河を渡りき。

アケロンはギリシヤ神話の三途の川である。死者にしか渡れぬ地獄の河を生きながらにして渡ったことをネルヴァルは誇らかに歌っているのである。

「オーレリア」の中で、彼は狂気に陥ったときの体験を地獄下りにたとえている。二度とあるのは二度の狂気と回数に固執するよりも、何回も陥った狂気の体験を一連のものと考えて、普通二度と渡れぬアケロンの河と言われるその河を二度渡った、あるいは往復したと解した方が辻褃が合うかも知れない。

オルフェの豎琴にのせ、交交に、

聖女の溜息と妖精の叫びを歌いつつ。

オルフェはギリシヤ神話のオルペウスで、その物語は大まかに言って三つに分けられる。

第一はアルゴ遠征の際、人魚セイレーネスの歌声に惑わされ、船が難波しそうになったとき、豎琴によって歌声に勝負を挑み、人魚を憤死

させる。

第二はもっとも有名な話である。妖精ともアポロンの娘とも言われる妻のエウリュディケーが死んだとき、彼は妻を忘れ兼ねて地獄へ下り、豎琴によって地獄の王や王妃、その眷族を感動させ、妻を地上に連れ帰ることを許される。しかし帰る途中、地上に出る迄は妻を見てはならぬという唯一の禁を破って、妻の方をふり返ったため、彼は妻を再び失ってしまう。

第三の話では、妻を失ったために女に見向きもなくなったので、彼は女達の恨みを買う。そしてバックスを信じるトラキアの女達に撲殺されるのである。

「オーレリア」の第二部のエピソードは「エウリュディケー！ エウリュディケー！」<sup>26</sup>であるし、その結末は、「私が経てきた一連の試煉を、私は古代人が地獄下りとして思い描いていたものになぞらえている」という一節で終わっている。<sup>27</sup>そしてこの最後の詩節もオルフェの物語を踏まえていることは明らかである。

聖女と妖精はこれまで述べてきた二人の女性と異なるものではない。星は女王であり、聖女である。汝は人魚であり、妖精である。「アルテミス」の中にはナポリの聖女(Sainte napolitaine)、つまり聖女ロザリアと深淵の聖女(La Sainte de l'Abime)という言葉が出てくる。これらはオーレリアの異名と考えられる。したがってこの詩の聖女も星と同一人物と見てよい。またオーレリアという名に吸収されるアドリエヌは物語において尼さんとなって若死する。聖女のイメージはアドリエ

ンヌとも無縁ではないように思われる。

溜息と叫びについては、とりたてて述べる必要はないかも知れぬが、極く在り来たりに考えると、星は死んで、地獄下りにおいて現われるから地獄にいることになる。一方妖精の方は死んではいない。何故聖女が地獄にいるのかという問題は「アルテミス」において考えるべきことであるから、ここでは触れない。詩人は一時汝に心を奪われるが、真実の恋人が忘れられないことを汝に告げて地獄に下るであろう。このような状況を設定してみれば、二つの言葉の意味は明らかである。

「オクタヴィ」では彼女とネルヴァルの交渉があったとき、真実の恋人はまだ生きていたことになっている。しかし彼の作品と事実に基づく考証との間には、時間や場所について明らかな相違がある。時間や場所や人間を意識的に混淆するのはネルヴァルが現実の世界を神話的世界につくり変える際の常套手段である。したがってこの詩の場合には、聖女と妖精はそれぞれアケロンの河を隔てた世界にいると考えた方が、第三節も第四節も判りやすい。

最後に詩人がオルフェの堅琴にのせて歌う歌は詩であり、あるいはもっと広く作品であることは言うまでもない。

こうして見てくると、第三節の一行目の神と人の恋がどのように彼の恋と一致しているかは、なかなか微妙である。ポエブスとリュジニャンは恋が不幸な結末を迎え、恋人や妻を失った後も何らかの形で相手と関わりを保つという点で似ていなくもない。ピロンがシャルル・ド・ピロ

ンならば、打首という不幸極まる結末は判っていても、恋の方が不明であるから何とも言えない。アモルの場合には最終的には幸福な恋である。ただネルヴァルが自らをたとえるとすれば、アモルよりもむしろプンケの方に置かれた立場に近いように思われる。それに音節数や脚韻の関係もあるだろうが、たとえるにはもっと適切な人物がいくらでもいるような気がする。

ネルヴァルは「アレクサンドル・デュマへの手紙」(A ALEXANDRE DUMAS)の中で、この詩を超自然的な夢想状態でつくられた十四行詩<sup>\*</sup>と言っている。しかしこの詩が綿密に構成されていることは見て来た通り明らかである。したがってこの四つの固有名詞も熟慮の結果決定されたに相違ない。

ジャック・ジュニナスカ (Jacques Geninascas) は Amour と Phébus という二人の神の名の中に Orphé という名が隠されていると指摘している。<sup>28</sup> このようなことは他にも誰か指摘していたように思うが、さしあたって思い出せない。考えてみると Lusignan と Biron という二つの人名の中にも何か隠されている可能性がある。しかしこれについての指摘は寡聞にして知らない。もしこれら二つの人名の中に何か隠されているとすれば、前の一对の場合との釣合からして、それは一つの人名でなければならぬ。そしてそれはオルフェと同じような人であるか、あるいはそれに対立するような人でなければならぬ。

この二つの個有名詞の綴り字からは様々な人名が抽出できる。しかしこれら二つの人名を並べた理由を考え合わせると、抽出されるべき適切

な人名は一つしかないように思われる。結論から言えば、二つの人名 (Lusignan・Biron) の中に隠されているのはネルヴァルの本姓ラブリュニー (Labruni) である。前の一対から抽出されるオルフェの場合と同じく、発音に関係のない末尾の e を欠いたラブリュニーである。作詩上の制約もあるから、完全なアナグラムにならないのは当然である。

ここにラブリュニーの名が出て来るのは理由が無いことではない。シヤルル・ド・ピロンの家系は元々ペリゴールの領主であった。一方リュジニヤンの領地アングウモアは一部ペリゴールと重なっている。そしてペリゴールは先に触れたように、ネルヴァルが祖先と見なしていたラブリュニー家の三つの古塔のある地である。それ故、リュジニヤン家、ピロン家およびラブリュニー家は、いずれもアキテーヌに縁のある家柄である。

このような仮定に立てば、第三節の初めにあのような神と人の名を一對ずつ並べた理由が誠によく判る。ネルヴァルは一對の神から、自らを擬すべき神話的人物を導き出し、アキテーヌに関わる一對の中世の伝説的人間から、それに類するものの子孫を自称する彼自身の名を導き出しているのである。

詩人は第一節と第二節において、過去の一時的な慰めが又もどって行くことを虚しく求めつつ、現実の絶望的な状態を断定的に歌っている。しかしそのような状態を有るが儘に肯定することは、詩人にとって到底我慢できることではない。そこで次元を変えて異なる目で見れば、つまり自分を神話的世界における試煉を受けている者と見なせば、その同じ

状態が今までとはまったく違った様相を呈してくる。

第三節において、現実世界から神話的伝説的世界へ読者の目を向けさせるために、詩人は神話の神と伝説的人間の名を四つ並べて、自分は一体何者なのか、これらのどれに該当するのかと自問する。そしてこの間の中には、実はもっと直接的な問が秘められている。やや意図の曖昧な点のある質問を構成する表面の四つの名の裏に意図の明瞭な二つの名が隠されている。自分はオルフェなのか、それともラブリュニーなのか。

第四節において詩人はその間に明確に答えている。自分は第一節及び第二節の現実の世界においては、恋人を失った救いようのない単なるラブリュニーかも知れない。しかしそれを神話的世界に置きかえて、その視点で見れば、単に人間と見えていたものが実は女王―聖女であり、人魚―妖精であった。そして自分は夢と狂気の中で人間には二度と渡れぬと言われているアケロンの河を二度も渡った。したがって自分はオルフェの如きものであると。

ちなみに、オウィディウスの「転身物語」にはオルフェの後日譚が語られている。トラキアで不幸な死を遂げた後、オルフェは極楽のエリュシオン野で、二度失った妻のエウリュディケーと楽しく暮らしたという。

#### 註

原文の引用又は参照はプレイヤード版、Nerval Œuvres の I、またはガルニエ版、GERARD DE NEVAL ŒUVRES の I からとし、それぞれ P または G で示す。

- 1 齋藤磯雄氏「フランス詩話」、新潮文庫。中村真一郎氏と入沢康夫氏共訳「ネルヴァル全集」第一巻、筑摩書房。
- 2 作者生前のテクニストの発表は二種。アレクサンドル・デュマにより一八五三年十二月十日「銃士」*le Mousquetaire* に、一八五四年「火の娘たち」*les Filles du Feu* 也。草稿が一種残っている。Le manuscrit Lombard と *le manuscrit Elnard*。各種のテクニストの間には字句、句読法等に多少の違いが見られる。用いたテクニストは一八五四年に「火の娘たち」で発表されたもの。
- なお A Alexandre Dumas des *Filles du Feu* はキャラクターがこの詩を「銃士」誌に発表したことと答える形で書かれてくる。この中でネルヴァルは自分と恋人の関係を *le Roman comique de Scarron* の主人公 *l'Étoile* と *Le Destin* の関係と重ね合わせる話を進めている。ms. Elnard のこの詩の題名が *Le Destin* であるから、その詩の中の *le brillant comédien naguère, le prince ignoré, l'amant mystérieux, le déshérité, le banni de liesse, le beau ténébreux* (p. 152—P) という一節が、その詩から「詩キャラクターの手紙の中の物語との間には極めて深く繋がりがある」と判断される。
- 3 筑摩版「ネルヴァル全集」第三巻、自筆家系図(内容概要)、入沢康夫氏訳。
- 4 Correspondance, A GEORGE SAND du 23 novembre 1953, GASTON PHOÉBUS D'AQUITAINE (p. 1107—1108—P)
- 5 Vêtu d'une robe longue à plis antiques, il ressemblait à l'Ange de la Mélancolie, d'Albrecht Dürer. (AURÉLIA p. 362—P)
- 6 Je croyais voir un soleil noir dans le ciel désert et un globe rouge de sang au-dessus des Tuileries. (Ibid. p. 397—P)
- 7 Je reconnus des traits chéris, et, portant les yeux autour de moi, je vis que le jardin avait pris l'aspect d'un cimetière. Des voix disaient :  
 ≪L'Univers est dans la nuit ≫ (Ibid. p. 374—P)
- 8 Le bateau qui me ramenait à Marseille emporta comme un rêve
- le souvenir de cette apparition chérie, et je me dis que peut-être j'avais laissé là le bonheur. Octavie en a gardé près d'elle le secret. (OCTAVIE p. 292—P)
- 9 Elle me dit : ≪L'épreuve à laquelle tu étais soumis est venue à son terme ; ces escaliers sans nombre, que tu te fatiguais à descendre ou à gravir, étaient les liens mêmes des anciennes illusions qui embaraissent ta pensée, et maintenant rappelle-toi le jour où tu as imploré la Vierge sainte et où, la croyant morte, le délire s'est emparé de ton esprit. Il fallait que ton vœu lui fut porté par une âme simple et dégagée des liens de la terre. Celle-là s'est rencontrée près de toi, et c'est pourquoi il m'est permis à moi-même de venir et de t'encourager. ≫ La joie que ce rêve répandit dans mon esprit me procura un réveil délicieux. Le jour commençait à poindre. Je voulus avoir un signe matériel de l'apparition qui m'avait consolé, et j'écrivis sur le mur ces mots : Tu m'as visité cette nuit. (AURÉLIA p. 408—409—P)
- 10 OCTAVIE p. 289—P この手紙は LETTRES A AURÉLIA V p. 387—G と同一内容。
- 11 ms. Elnard
- 12 Sur les montagnes de l'Himalaya une petite fleur est née. — Ne m'oubliez pas ! — Le regard chatoyant d'une étoile s'est fixé un instant sur elle, et une réponse s'est fait entendre dans un doux langage étranger. — Myosotis ! (AURÉLIA p. 409—P)
- 13 Chaque fleur est une âme à la Nature éclose ; (VERS DORES p. 8—P)
- 14 Vingt chaumières dont la vigne et les roses grimpanes festonnent les murs. (SYLVIE V p. 252—P)
- 15 Éms. luard
- 16 Il (le perroquet) me transporta à Rome sous les berceaux fleuris de

8 Le bateau qui me ramenait à Marseille emporta comme un rêve

≪L'Univers est dans la nuit ≫ (Ibid. p. 374—P)

6 Je croyais voir un soleil noir dans le ciel désert et un globe rouge de sang au-dessus des Tuileries. (Ibid. p. 397—P)

5 Vêtu d'une robe longue à plis antiques, il ressemblait à l'Ange de la Mélancolie, d'Albrecht Dürer. (AURÉLIA p. 362—P)

4 Correspondance, A GEORGE SAND du 23 novembre 1953, GASTON PHOÉBUS D'AQUITAINE (p. 1107—1108—P)

3 筑摩版「ネルヴァル全集」第三巻、自筆家系図(内容概要)、入沢康夫氏訳。

2 作者生前のテクニストの発表は二種。アレクサンドル・デュマにより一八五三年十二月十日「銃士」*le Mousquetaire* に、一八五四年「火の娘たち」*les Filles du Feu* 也。草稿が一種残っている。Le manuscrit Lombard と *le manuscrit Elnard*。各種のテクニストの間には字句、句読法等に多少の違いが見られる。用いたテクニストは一八五四年に「火の娘たち」で発表されたもの。

なお A Alexandre Dumas des *Filles du Feu* はキャラクターがこの詩を「銃士」誌に発表したことと答える形で書かれてくる。この中でネルヴァルは自分と恋人の関係を *le Roman comique de Scarron* の主人公 *l'Étoile* と *Le Destin* の関係と重ね合わせる話を進めている。ms. Elnard のこの詩の題名が *Le Destin* であるから、その詩の中の *le brillant comédien naguère, le prince ignoré, l'amant mystérieux, le déshérité, le banni de liesse, le beau ténébreux* (p. 152—P) という一節が、その詩から「詩キャラクターの手紙の中の物語との間には極めて深く繋がりがある」と判断される。

3 筑摩版「ネルヴァル全集」第三巻、自筆家系図(内容概要)、入沢康夫氏訳。

4 Correspondance, A GEORGE SAND du 23 novembre 1953, GASTON PHOÉBUS D'AQUITAINE (p. 1107—1108—P)

5 Vêtu d'une robe longue à plis antiques, il ressemblait à l'Ange de la Mélancolie, d'Albrecht Dürer. (AURÉLIA p. 362—P)

6 Je croyais voir un soleil noir dans le ciel désert et un globe rouge de sang au-dessus des Tuileries. (Ibid. p. 397—P)

7 Je reconnus des traits chéris, et, portant les yeux autour de moi, je vis que le jardin avait pris l'aspect d'un cimetière. Des voix disaient :  
 ≪L'Univers est dans la nuit ≫ (Ibid. p. 374—P)

8 Le bateau qui me ramenait à Marseille emporta comme un rêve

le souvenir de cette apparition chérie, et je me dis que peut-être j'avais laissé là le bonheur. Octavie en a gardé près d'elle le secret. (OCTAVIE p. 292—P)

9 Elle me dit : ≪L'épreuve à laquelle tu étais soumis est venue à son terme ; ces escaliers sans nombre, que tu te fatiguais à descendre ou à gravir, étaient les liens mêmes des anciennes illusions qui embaraissent ta pensée, et maintenant rappelle-toi le jour où tu as imploré la Vierge sainte et où, la croyant morte, le délire s'est emparé de ton esprit. Il fallait que ton vœu lui fut porté par une âme simple et dégagée des liens de la terre. Celle-là s'est rencontrée près de toi, et c'est pourquoi il m'est permis à moi-même de venir et de t'encourager. ≫ La joie que ce rêve répandit dans mon esprit me procura un réveil délicieux. Le jour commençait à poindre. Je voulus avoir un signe matériel de l'apparition qui m'avait consolé, et j'écrivis sur le mur ces mots : Tu m'as visité cette nuit. (AURÉLIA p. 408—409—P)

10 OCTAVIE p. 289—P この手紙は LETTRES A AURÉLIA V p. 387—G と同一内容。

11 ms. Elnard

12 Sur les montagnes de l'Himalaya une petite fleur est née. — Ne m'oubliez pas ! — Le regard chatoyant d'une étoile s'est fixé un instant sur elle, et une réponse s'est fait entendre dans un doux langage étranger. — Myosotis ! (AURÉLIA p. 409—P)

13 Chaque fleur est une âme à la Nature éclose ; (VERS DORES p. 8—P)

14 Vingt chaumières dont la vigne et les roses grimpanes festonnent les murs. (SYLVIE V p. 252—P)

15 Éms. luard

16 Il (le perroquet) me transporta à Rome sous les berceaux fleuris de

la treille du Vatican. ... (PANDORA VI p. 355—P)

17 Correspondance, A DANIEL GIRAUD vers le 10 janvier 1854 (p. 1127—P)

18 Aurélie, en amazone, avec ses cheveux blonds flottants, traversait la forêt comme une reine d'autrefois, et les paysans s'arrêtaient éblouis. — Madame de F... était la seule qu'ils eussent vue si imposante et si gracieuse dans ses saluts. (SYLVIE XIII p. 271—P)  
未入の姿ハーンホーニ野遊来入ントヤ・ゾーグハ眠ぢゆルヤウニ  
一編ぢ掛クニ而用ハルナ草ハ野遊来ハルニ

Cette nuit, le bon Saturnin m'est venu en aide, et ma grande amie a pris place à mes côtés, sur sa cavale blanche caparaçonné d'argent. Elle m'a dit : «Courage, frère ! car c'est la dernière étape.»  
Et ses grands yeux dévoraient l'espace, et elle faisait voler dans l'air sa longue chevelure imprégnée des parfums de l'Yémen. Je reconnus les traits divins de \*\*\*. (AURÉLIE MÉMORABLES p. 409—410—P)

姉嬢ニモ \*\*\* の顔形ニ Sophie ヲ見ルニ

19 Qu'elle était belle ! non pas plus belle cependant qu'une autre reine du matin dont l'image tourmentait mes journées. (PETITS CHÂTEAUX DE BOHÊME III p. 71—P)

20 ms. Éluard

21 C'était, nous dit-on, la petite-fille de l'un des descendants d'une famille alliée aux anciens rois de France (SYLVIE II p. 246—P)

22 Aimer une religieuse sous la forme d'une actrice !... et si c'était la même ! — Il y a de quoi devenir fou ! (Ibid. III p. 247—P)

23 Pendant mon sommeil, j'eus une vision merveilleuse. Il me semblait que la déesse m'apparaissait, me disant : «Je suis la même que Marie, la même que ta mère, la même aussi que sous toutes les

formes tu as toujours aimée. A chacune de tes épreuves, j'ai quitté l'un des masques dont je voile mes traits, et bientôt tu me verras telle que je suis.» (AURÉLIE p. 399—P)

la déesse ヲモ Isis ヲ見ルニ 其の顔形の眞實ハ神聖ノミヤルニ  
トハソウマノ「眞實ノモク」ノ終極ニ至ルニニキヤノの輪ノ中ニヤムク  
ハ眞實ニ至ルノ中ニヤムクノミヤルニ見ルニ

24 Tous les jours aussi, je me rencontrais dans la baie azurée avec une jeune fille anglaise, dont le corps délié fendait l'eau verte auprès de moi. Cette fille des eaux, qui se nommait Octavie, vint un jour à moi toute glorieuse d'une pêche étrange qu'elle avait fait. Elle tenait dans ses blanches mains un poisson qu'elle me donna. (OCTAVIE p. 285—P)

25 ホクタヤノ風浪の舞ハウツタニ

Reconnais-tu le Temple au peristyle immense,  
Et les citrons amers où s'imprimaient tes dents,  
Et la grotte, fatale aux hôtes imprudents,  
Où du dragon vaincu dort l'antique semence?...

(DELIFICA p. 700—G)

ウツタノ興興ノ舞ハウツタニ C'est la «grotte des Sirenes» de Tivoli.  
ユルニ。ホクタニモトニ見ルニ

26 Eurydice ! Eurydice ! (AURÉLIE p. 385—P)

27 Toutefoix, je me sens heureux des convictions que j'ai acquises, et je compare cette série d'épreuves que j'ai traversées à ce qui, pour les anciens, représentait l'idée d'une descente aux enfers. (Ibid. p. 414—P)

28 Les Chimères de Nerval par Jacques Geninascas, Larousse Université 1973. p. 116 Il (le second tercet) comporte le nom d'Orphée qui représente le terme complexe Amour+Phébus.